

## よくもここまで来たものだ

著者	片桐 洋一
引用	百舌鳥国文. 2021, 30, P.1-2
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/00017422">http://hdl.handle.net/10466/00017422</a>

## よくもここまで来たものだ

片桐 洋一

私は昭和六年（一九三一）九月の生まれ、今年八十九歳になりました。小学校一年の時、父の仕事の都合で、旧満州国（現中国東北部）の瀋陽（当時は奉天と呼んでいました）へ渡り、奉天高千穂小学校という日本人小学校に編入されました。

小学校四年生の時、いわゆる大東亜戦争が始まり、世の中は軍事色一色となり、中学校の入学試験も体育と口頭試問だけ。しかし体格がよかったせい、奉天第二中学校という日本人だけの一流の中学校に入学できました。

敗戦後一年たった中学二年の時、引揚げ。リュックサック一つだけを持って、母の姉が嫁いでいた兵庫県小野市に帰ってきました。その親族たちに、終戦直後中学校へ行きたいと言うと、変な顔をされました。私の母は負けじ魂の塊のような人間でしたから、引揚者が中学校（今の高等学校）へ行くのは身の程しらずだと思ったに違いないと言いきり、小野市を出て自分の妹の住む同じ兵庫県の明石市のバラック小屋に移り住みました。そのせいで、私は兵庫県立明石中学校（高等学校）の卒業生です。

しかし私が転入学した日はちょうど中間考査の最中でした。範囲を決められて中間考査の準備をして来ている他の生徒に対して、準備もなく教科書さえも揃っていない転校生の私が勝てるはずありません。当然さんざんな結果になりました。担任の塚本先生も「これでは駄目だ。一年下の学年に編入しよう」とおっしゃいました。しかし、「私は

引揚者ですから財産も時間もありません。がんばりますから、何とか、この学年に入れて下さい」と涙ながらにお願いし、夏休みも肉体労働をしながら、高校の使われていない室で勉強していました。

そんな努力のおかげか、高校三年の夏休み明けには、クラスで一番か二番の成績になり、現役で京都大学文学部に入学出来ました。

高校の担任だった塚本先生は定年で明石高校を退職され、私立の須磨学園で教えておられました。私が京大へ入って暫くたった時、須磨学園へ来てくれと連絡がありました。指定された時間に参上すると、「講演 努力は必ずむくわれる 片桐洋一氏」という看板と共に塚本先生が登場されました。その感激は言葉に出来ません。

その塚本先生は既に亡くなられましたが、私は、その後も、陸上競技でがんばっている須磨学園を応援しております。

真面目に努力していれば必ず報われるという旧師の教えを若い人にお伝えしたく、昔話をいたしました。

(かたぎり よういち・大阪女子大学名誉教授)